

---

# いとしのリリィ

げんたろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いとしのリリイ

【NZコード】

N3156Y

【作者名】

げんたろう

【あらすじ】

不運な事故で視力を失い、天涯孤独となり、スポーツ生命も奪われてしまつたりリイ。

失意の中、手術のための麻酔を施されたのだけど・・・目覚めたら家族が出来ていました。しかも若返っている!?

テニプリの一次創作ですが、ヒロインに知識はありません。兄弦一郎や、テニプリメンバーに愛されながら第二の人生を謳歌します!

田原の新世界ー? (前書き)

一  
次では初投稿です。

## 田代の新世界！？

「大丈夫だよ、また見えるよ！」なる

私の手を握る、あたたかい手。

「でも・・・もう試合には出れないでしょ？」

「リリイ。そんな悲しいことを言わないで。試合には出れないけど、他の喜びだって見ることができるんだ」

でも・・・試合には出れない。

目に障害を持つ選手は引退するしかないのだ。  
物心ついたときから、ずっと心血を注いできたのに・・・志半ばで  
諦めないといけないなんて。

「君にはボクがついている

そうね。

でも、代わりにはなれない。

私は見えぬ目を瞑り・・・手術室へ入った。

「かつ看護師さん！ 娘が目を覚ました！」「リリイちゃん！ 私が見える？ ママが分かる！？」

・・・・・・・。

誰？

私の知るママの顔と違うんですが。ちなみにパパも。パパつていうよりく親父く顔だし、この人。それに、私のパパとママつて死んでるし。

そう。

両親が死んで15年（私が6歳のころだった）。アメリカに嫁いだ叔母に引き取られて・・・それ以来、ずっとアメリカ暮らし。

その叔母夫婦とドライブ中に事故に遭つて・・・。私だけ生き残つた。

でも、視神経を痛めてしまつて、再手術のために入院していたはず。・・・ニューヨークで。

なのに、見渡す限り東洋人ばかりつて、なんで！？

あわあわしている私に気づいた医者が鎮静剤を打つ。

「もう少し眠らせてあげましょ」

「そうですね。リリイちゃん、ゆっくり眠ってね」

いや、ゆっくり眠るって・・・これが夢なんじゃ？？

けれど。

もう一度眠つてみたら、夢をみた。夢の中でも夢つて見るの？

その夢では私が、別的人生を歩んでいた。

私は3人兄弟の末っ子。

やつと生まれた女の子に、祖母と母は狂喜乱舞。

祖父や父の教育方針に不安を覚えた二人の意志で、私はアメリカに嫁いだ叔母に預けられた。

そこでやつぱり私は総合格闘技にのめり込んで、ドライブで怪我をして（叔母夫婦も無事でした）

心配した家族に懇願されて日本に戻つてきたりしい。

なるほど。

基本ベースは私のままみたいだし。

元の世界に戻つたところでたいした未練なんてないし。

だから、田覚めたら、あのパパママが居てくれたらいなーって思つていたりした。

神様が願いを叶えてくれたのかな?

田覚めたら、ママと祖母らしき人が居た。

二人ともとても喜んでくれて。

しばらくしたら、パパと祖父。

それから上の兄。

最後に下の兄が来た。

その時、この家族と私って血、つながっているんだなあと思つた。

下の兄と私って似すぎ。

黒髪ストレートなどいろも、田つきが鋭いとこいろも。  
ちょつと(?) フケてるといいろも(涙)

そうそう。私7歳若返つていました。  
まだ14歳なんだつて。ビックリー。

でも既に14歳で成長しきつちゃつてるから、21歳と顔は変わらないです。違和感なし。

14歳だつたら、色々とやり直しもきくだろう。

夢中になれるものが出来るかもしれない。

そ、う。

私の田はまやつぱり完璧には治らなかつたから。

もつコンングには上がれない。

全米ジュニアでは3位。

全米女子バンダム級では順調に勝ち進んでいたのに・・・。

キックボクシングもやってて。  
空手と柔道も頑張つてたのに。

たまにプロの試合に出て。

ブラッディ・リリイって異名まで貰つていたのに。  
(皮膚が薄いらしくつて良く流血してたのよね)

でも、なんだかくやしいから。

趣味範囲でも続けよつと思つた。

「百合。 なにか食べたいものはあるか?」  
「ヨーグルトが食べたいわ、弦兄様」

「そっそつか！ では売店で買つてこみつー。」

下の兄の弦兄様は（こうひ呼んで欲しいそつだ）、私より一つ上の15歳。

格闘技でもしているのかな？っていう体格だったんだけど、テニスをしているんだそうです。・・・以外だ。

大和男児を見た目と中身でいって、「リリイ」って呼べなくて「百合」って呼んでる。

新鮮だし、「百合」って名前も可愛いから許す！

そう。私は家族で一番すきなのは弦兄様だ。

皆優しいけど、弦兄様のぶつきらぼうな優しさが好きだし、安心する。

私が少しでも黙つていると「食べたいもの」をきいてくる。  
私は格闘家で始終減量していたせいか、胃が小さい。だからたまにおねだりすると、すぐ喜んでくれる。

今私の目標は、退院したら弦兄様と早朝ジョギングすることだ。

兄様は毎日走っているんだって。

私も元格闘家。ジョギングは日課だった。

弦兄様にそう言つたら、真っ白のジャージを買っててくれた。

私のイメージなんだそうだ。照れるなあ（あつち？じゃ私のイメージ絶対赤だったよね）。

ちなみに。

お祖父様は白いキャップ。

パパは、ランニングシューズ。

お祖母様はきれいなタオル。

ママはストップウォッチ付の時計。

上の雄一郎お兄ちゃんはサングラスを買ってくれた（術後で太陽がまぶしつて言ったから）。

皆優しい。

この家に生まれてよかつた！（あれ？生まれてないんだっけ？）

『覚ゆる新世界!』（後書き）

真田やんちの子供になりました、リリイちゃん。

コリヤちゃんと神のナ（前書き）

神のナ視点です。

## リリィちゃんと神の子

今日は二回、一度の検査口。

はつかり言って憂鬱なんだけど、仕方ないよね。

「うそ、特に異常はないみたいだね」

先生に言われてほっと一安心。コレが手術後の二回、一度の儀式。  
それはちっとも慣れなくて、いつ「異常あり」の一言が出るかと緊張してしまう。

「そろそろ学校に行けそうだね。テニスも思いつきりできる。君の  
リハビリの様子は聞いているよ」

「全国大会に間に合わせたいですか？」

「ははは。君のがんばりが適うように私も協力するよ」

「あっがとうござります」

主治医の先生はいい人なんだけど、おしゃべりが好き。そろそろ帰  
りたいなーと思っていたのに、先生はさらに話題を振った。

「ここの間ね、こっちに転院してきた子がいるんだよ。幸村君よりひとつ下だったかな？ 幸村君のときも、「キレイカワ系な男の子だなー」って思つたんだけど、今度の子もすげーよ」

そんなこと思つてたんだ（笑）

「す」「いんですか？」

「うん。14歳だけど、見た目成人」

そういう意味で『す』『い』んだつたら、こっちにも弦一郎つていう奴がいるんだけど？

「雰囲気も大人っぽいし、背も高いし。いい子なんだよ。田を怪我してね。経過入院中なんだけさ。

あの子もスポーツを本格的にやつてたみたいで。そこは幸村君と違つて・・・もう無理なんだけどね」

・・・・・ そんなヤツが入院しているんだ。

「強い子だよ。今何か必死で探そうとしている。それでね、テニスのこと少し教えてもらえないかな？」

「テニスを？ その子つて今まで何をやつてたんですか？」

「ボクシングだつてさ（正しくは総合格闘技だが、上手く話が伝わらなかつた模様）。あんなキレイな子なのに以外だよねえ」

「いえ、俺まだ会つてないんで」

「あ、そうだつたね。ビックリするよ。あんなキレイな子そういうから。性格もいいし。なんでもお兄さんがテニスプレイヤーらし

くつて、テニスに興味があるみたいなんだよ。幸村君のことを話したら是非会いたいって

それって事後承諾つてやつなんじや・・・。

「分かりました。これからいいんですか?」

「うん、大丈夫。彼女は経過入院で制限あるわけじゃないから

「彼女? 女の子なんですか?」

「そうだよー。リリィちゃんつていつてね。すげいい子だよ、キレイだし。でもお兄さんがコワモテだから気をつけたほうがいいよ?」

ボクシングが出来なくなつたきれいな女の子（14歳）。性格良し

そのキャラクターに俺は興味もあり、彼女の部屋へと訪れた。

白いレースのカーテンがまず目にに入った。

品のいい花瓶には真っ赤な薔薇の花。

ベッドに寝るのは、白雪姫みたいな女の子だった。

黒檀のよつよつな黒い髪  
雪のように白い肌  
血のよつよて赤い唇

そんな一節を思い出す。

黒田の多い瞳が開いて俺を捉える。

「・・・だれ？」

「山本先生の紹介で来た、幸村精市。君がリリイちゃんだよね？」

リリイちゃんは身体をゆっくり起こした。乱れたガウン（白いレスのガウンだった）の帯を締めなおして、再び向き直る。

「寝ているとい、邪魔しちゃったね」

「いえ。今寝ると夜に眠れなくなってしまうから。・・・初めましてリリイです。わざわざ病室まで来てくださいてあつがとうござります」

中学一年生だとこいつの、乱れのない言葉使い。いいところのお嬢さんなのかな？

「とっても強いテニスプレイヤーだつて聞きました」「そんなことないよ。負け無しってわけじゃないしね」「負けたから弱い、とこいつのは違うと思います。無敗の偉大なプレ

イヤーなんて聞いたことないもの

その後、俺は1日に1時間ほどリリイちゃんとの時間を持った。

テニスのこと

勉強のこと

当たり障りのない内容から、次第に自分たちの術後の話までするようになった。

俺は退院したらすぐにテニスに復帰したかったので、毎日のトレーニングは欠かさないでいた。

でも、筋力は明らかに落ちていてそれが腹立たしく、トレーナーが止めるまでトレーニング室にこもっていることも少なくはない。

リリイちゃんは、俺の焦りを感じ取つたんだろう。ある日病室を訪ねると、俺を屋上へ誘つた。

屋上にはバケツが3つとたくさんのテニスボール。

リリイちゃんはその一つを俺に放つた。

「ラインをマジックで赤・青・黒で塗り分けているの。私が投げるからこれで受け止めてバケツに入れて」

リリイちゃんはさつて俺にラケットを手渡し、5メートルほど離れる。

「リトルリーグでピッチャーしていた経験もあるのよ?」

そういうたリリイちゃんの球は結構な速度だ。90キロくらいにあると思う。

俺はラケットでその球威を吸収して、色分けしたボールをバケツに落としていく。球威を落とさないと、バケツに入ったボールは跳ねて戻ってしまうから、けつこう集中力がいる。

「幸村さん、すごい!」

ボールを次々にバケツに落とす俺に、リリイちゃんが間を置かずに次々にボールを放つてくる。

しかも緩急をつけたり、カーブやフォークまで放ってきて、こちらも集中力を切らすことはできない。

「おしまー」

しばらくするとリリイちゃんがそう言った。

気づけばカゴ一杯のボールはもうなくなっていて、色分けされたそれはバケツにキッチリと収まっている。

「・・・うれしいサプライズだったよ、リリィちゃん」

「気分転換出来た?」

リリィちゃんはタオルを俺に差し出す。そうこえは汗が顎から滴つている。

「私ね、血圧療養に帰ることになったの」

「・・・そなんだ。おめでとう」

「あまりおめでたくもないんだけじね。退院してももう無理なもの」

何が・・・と聞かなくとも分かる。彼女の入院は交通事故。一番時間のかかった場所は『田』

だから彼女はもうボクシングが出来ない。

「でも幸村さんは可能性あるでしょう? だから私の錢です。退院まであと一週間ですけど、それまでこの時間の屋上は私と幸村さんの貸し切りにしてもらつたの。

私はテニスのことはあまり知らないけれど・・・動体視力はスポーツマンの必須でしょう?

そのくらいなら協力できますから」

リリィちゃんは俺の手を握った。彼女も運動していたので暖かい手。

「幸村さんにはがんばってほし」

そしてリリィちゃんは一週間後病院を後にした。

彼女が居なくなつて、連絡先も苗字も知らないことに気づくなんて、本当にあの時はギリギリだつたんだな、俺。

個人情報だから先生にも尋ねられない。名前しか（その名前だつて日本人離れしていて、あだ名かもしれないと思（う））知らない俺は、もう一度君に会えるのかな？

## リリイちゃんと神の子（後書き）

幸村氏の入院時期及び時間は、原作に沿つております。ご了承ください。

彼女が訂正しない限り、ほとんどの人物が「リリイちゃんはボクサーだった」と勘違いします。

リリイちゃんと初めてのお友達

「わしのほうが！」

「ジの馬」が何を

「一九、二〇、二一、二二」

「あのー……おじいちゃんたち、ちょっと静かにしてもらえますかしらあ~

「」の「」

• • • • •

「ブチヨー。携帯なつてる入よ」  
「む。・・・すまんな、越前」

卷之三

宙を舞つた携帯をキヤッチして、手塚国光は着信を確認する。

と「元へ困る内容でもないだらう、そのまま通話に切り替える。

「はこ、国光です」

「あ、国光～？ おかあさんだけビ」

「どうしたんですか？」

「あのね、今日おじいちゃんのお友達が来ているの」

菓子や酒でも買つてきて欲しいのだろうか・・・？

「それがどうかしましたか？」

「ケンカしちゃったのよ」

だからどうした。

「それで？」

「孫自慢が高じてみたいなんだけど・・・国光とそのお孫さんを対決させるって言つててね」

「対決・・・」

「部活が終わる頃にそちらのお孫さんを青春学園の校門に向かわせるからよろしくね」

対決は決定なのか？

ツーツーツー

言いたいことだけ言つて、母の電話は切れた。

祖父の友人とは・・・おそらく立海大附属の真田弦一郎の祖父のことだらう。

対決・・・真田と？ テニスというわけではないだらう。自宅にて

「スコートはない。

剣道……でもないだろ。そちらの道では真田には遠く及ばない。  
無難などひで将棋か囲碁あたりか……。

なんとも憂鬱な気分で手塚は部活を終えた。

「よし、解散！」

「あーがつした！」「」

「手塚、今日タ力さんちに寄らないかい？」

「いやー！俺も行く！タ力さんちのチラシ食いたい！」

「俺も行つていっすか？」

「いいよ。皆で行こつか

「・・・すまないが、俺は遠慮する

「えー！？ どつたの手塚？」

「先約がある」

「さつきの電話つすか」

「ああ。皆で楽しむとい

「そうだな。次は一緒にこつな、手塚」

待ち合せもあり、手塚は手早く着替えると校門へと急いだ。

「はい」

『おかあさんだけじ。今どこかしらっ?』

「もうすぐ校門です」

『そう、良かつたわあー。リリィちゃんも着いたみたいなのよ』

「・・・・・・」

リリィちゃん?

「誰ですか、それは」

『真田さんといふのお孫さんよ?』

嘘だ。

真田家にそんな洋風な名前をもつ人間がいるわけがない。  
人間じゃないとすれば・・・。

「猫ですか」

『なに言つてゐる、国光』

「では、犬ですね」

『人間に決まつてゐるでしょ? 女の子よ』

「・・・・・・」

「私服だからすぐに分かると思つわ。声を掛けたあげてね」

ツーツーツー。

今日の放課後は、自宅で皇帝・真田と将棋（か園碁）。

だと信じて疑わなかつた手塚に衝撃の事実。

とつあえず校門へ急ぎ、門柱に私服の女性を発見した。

黒い長い髪。

田差し避けなのだろうか、サングラス。

白いロングワンピースが髪と一緒に風にそよいでいる。

部活帰りの生徒が皆注目するほど田立つその女性に手塚は近づいた。

「真田リリイさんですか？」

- 「手塚の知り合い！？」
- 「すげーな、手塚」
- 「背高くてすごい美人よね」
- 「サングラスで顔わからんないじやん」
- 「目見えなくとも分かるよ、スタイルもいいし、絶対美人だつて！」
- 「手塚やるなあ～。年上の恋人？」
- 「見た目つりあつてるじやん」

なんだか背後がさわがしいが、無視の方向。

「はい。手塚国光さんですか？」

「ああ、待たせてすまなかつた」

真田の妹＝年下と判断し敬語は避けた。

「初めまして。祖父がお世話になっています。真田リリイです」

「ひがいりや。手塚国光だ」

「君の兄とは試合で逢つこともあるが、妹が居るといつ話は聞いた  
ことがなかつた」

「一才足らずでアメリカに渡つたので、兄妹として暮らしてからまだ日が経つていません」

「込み入った理由があるのならば・・・」

「いえ。隠すほどの理由ではないんです」

といつて語ってくれたアメリカ行きの理由は・・・。

語るのがちょっとアレな、出来たら隠しておいたほうが良いと思われる理由だった。

が、帰国の理由は彼女の今後の人生にもかかわるもので。

日差しのためかと思っていたサングラスを見て、ほんの少し胸が痛んだ。

「君は将棋は強いのか？」  
「・・・将棋、ですか？」  
「ならば囲碁だらうか」  
「チエスなら出来ますが」  
「そうか・・・。チエスは俺のほうが素人だ」

一体あの二人は何で勝負させるつもりなんだ？

その後。

チエスのルールや将棋のルール。囲碁の奥深さなどと話したり。  
『真田の帽子』の事実などを聞いているうちに自宅へたどり着いた。

「まあ～まあまあまあ～～～！ ようこそいらっしゃい、リ  
リイちゃんよね～！」

母親の奇妙な挨拶を受けた彼女は、案内されるまま祖父の部屋へ。  
俺は着替えてから行くことにして、自室へ向かった。

着替えて部屋を出ると

「すつ」と美人さんねえ～。真田さんちのリリイちゃん。おかあさ

ん、ビッククリしちゃったわあ。国光はビッククリしなかつた？

「別に・・・」

名前には驚いたが。

「いやだわあ）。沢 のモノマネ？ 似ていなし、古いわよ、国光」

別にまねしたわけではないが・・・（そもそも沢 とは誰だ）。

そのまま母と一緒に祖父の部屋に行くと・・・。

「実に無念だ！」

祖父の叫びが聞こえた。

扉を開けてみると・・・祖父が肩を落とし、真田家の祖父がふんぞり返っていた。

「おお、国光か・・・。つむう～」

孫の顔をみて顔をしかめないでもらいたい。

「はつはつは！ わしの勝ちじゃな！」

「なにを！ お前にリリイちゃんのような隠し孫が居ると知つていれば勝負せなんだわ！ 弦一郎君であれば、国光の圧勝であつたものを・・・！」

「負け犬の遠吠えじやの。それに弦一郎と国光君ではいい勝負じや」「いや、弦一郎君であれば、ワシの国光のほうが」「いや、弦一郎だつて！」「いやだから」

「だからもなにも

「おじこさとたち、ケンカはもつ辞めへくださこねえ？」

「・・・はい」

「一体なにがあつたんだ？」

「あ。私も自己紹介しただけですから」

彼女が自己紹介しただけで、祖父が負けを認める俺の欠点とはなんだ？

「孫自己紹介よ」

「やい。孫自己紹介。真田のクソジジイが『ワシの孫は・・・』などと血脈していくもんでな。つこつこ『わしのところの国光も・・・』なんて言い返してしまひての」

「『じひちの孫が可愛いか勝負することになつたんじや』」「

「まあ。それじゃあ、国光が負けても仕方ないですわね。女孫と男孫じや可愛さレベルが違いますもの」

母の言葉になんとなく、彼女を見た。

室内のため、サングラスは外している。

切れ長の目は兄に似ているが、黒目勝ちなといふと長い睫毛はやはり女子なのだな、と思わせる。

否、クラスの女子とは全く違う。

見下ろすほどビのクラスの女子とは違い、田線をほんの少し下ろすだけでもいい高身長。

手足が長く、頭も小丸るので、私服なだけでなくあれほど田立つたのだと気づく。

そして・・・美醜に重きをおいているわけではないが、美人だ。

「いいの?、真田。わしもリリィちゃんのよつた孫が欲しいわ

「やらんぞ、手塚」

「数日国光と交換せんか?」

「まあ、いい案ですわね、お義父さん!」

賛同するな、母さん。

「国光くんはいい子じゃが、リリィちゃんとは交換でモーんの?。・・・

・弦一郎なら」

「いや、弦一郎君は結構じや」

「私も遠慮しますわ~」

皇帝も形無しだな・・・真田。

「あ! そうですわ、お義父さん!... いい」と思つきましたわ

「なんだね?」

「リリイちゃんが国光の彼女になればいいんですね!...」

「「何!?」」

「そうだわ~。どうですか真田のおじいちゃん。国光は真面目だし、生徒会長だし、スポーツ万能だし、間違つても女の子に手をあげたりしないし、奥手で純情だから浮氣もしない

と思ひんですかど〜

「む〜〜。」

「考へてもみてぐだせこよ。国光以外の男の子がリリイちゃんの彼氏になつたりしたら・・・。絶対に国光より顔も悪くて成績も悪くてスポーツもできなくて、ひょつとしたらリリイちゃんを叩いたり、浮氣したりするかもしれないんですよ?」

「そもそもそんな男は叩つ切る〜〜。」

「でしょ〜〜。だから国光がいいわよ、リリイちゃん」

だからとは何だ。

「やうだな。リリイちゃんに恋人が出来るなど考へただけで虫睡が走るが、国光君なら合格だ。・・・ワシは反対せん」「リリイちゃんが国光の彼女になれば、わしの孫も同然じやな」「私の娘も同然ですわねー」

本人を無視して話が展開していく中、彼女が口を開いた。

「お祖父さま、やうやく帰らな〜とお祖母さまにしかられてもかばつてあげませんよ?」

「む〜〜。おことあるか

「はい。長々と〜」迷惑おかげしました」

「リリイちゃん。わしの〜とまは国一おじこあやんと呼んでくれてか

まわないよ

「私も彩香おかあさんって呼んでほしいわ」

「・・・すまん」

玄関まで見送る際、祖父と母の奇行をとりあえず謝った。

「まだ帰国したばかりで友達も居なくて・・・。今は恋人よりお友達が欲しいんです、私」

「そつそつか！ では国光はリリイちゃんのお友達じゃ！」

「そうね！ 日本ではじめてのお友達ね！」

「・・・お友達になつてくれますか？ 国光君」

これだけ一人に気に入られて『手塚さん』とも呼べなくなつた彼女が、俺の名前を呼んだ。

「ああ、よろしくたのむ」

そうして、手塚国光は、真田リリイの『日本ではじめてのお友達』になつた。

## リリイちゃんと初めてのお友達（後書き）

確か真田家と手塚家の祖父は知り合いだつたはず。

あと、ペアアプリ以前に書いたものを転用しているので、真田兄は自身設定です。よつてガックンに似た甥っ子は登場しません。ご了承ください。

## リリィちゃんの救世主伝説（前書き）

もともとはハイキックで書いていたのですが、頭突きに変更。ハイキックと頭突きってどっちがインパクトありますかね？

## リリイちゃんの救世主伝説

その人は白いジャージを着た救世主だった。

ヴァイオリンのレッスンが終わった、平日の21時。いつも迎えに来てくれる母が不在の為、地下鉄で帰ろうと繁華街を小走りに走つて居たとき、通行人の一人と肩が触れた。

「あ、すいません  
「つてえなあー！」

ギロリと俺を睨んだのは・・・どこから見ても、正真正銘「チンピラ」風の男だった。

マズイ、と思ったのが顔に出たのだろう。男は俺の頭から爪先まで舐めるように見た後、ニヤリと笑つた。

カモと判断された俺は、路地裏の人気のない場所でネチネチとイチヤモンをつけられていた。

「邪魔」

「ア”ア！？」

メゾソプラノの声が路地裏に響いた。

「堂々と言つてのけたのは、俺とさほゞ年は変わらない少女。白を基調としたジャージが夜の繁華街に鮮やかに浮き上がつっていた。

「なんだ、えらい別嬪なお嬢ちゃんじゃないか？　いい店紹介してやろうか？　小遣いかせげるぜ？」

「No, Thanks.」

女の子はニッコリ笑うと、手を伸ばしてきた男の腕をぐぐり抜け、胸倉を掴むと見事な頭突きをかました。

\*\*\*

「あつぶねえなあ～。そんな場所通るからだぞ、激ダサだぜ！」  
「六戸の言つとおりやな。高いヴァイオリンもつて歩いとつたら力七と思われても仕方あらへん。タクシーで帰り」「にしても、格好いいじゃん、そいつ」

「バカ野郎。チンピラを頭突き一発で倒せる女が、ただの「格好いい女」なわけねえだろ。・・・もう近寄るな」

跡部がズバリと鳳にクギをさした。

「で、でも！　お礼だけは言いに行きたいんです！」

ヘタに係つたらテニス部に迷惑がかかるし、どう見てもヤバい人だし・・・怪我したらテニスが出来なくなるし・・・一体どうしたらいいんだろう？　と思っていたとき、颯爽と助けてくれた人だ。俺を助けたことで、迷惑がかかっていたりしたら・・・と考えるとやつぱり一度逢つてきちんとお礼を言いたい。

「部員が世話になつたことだしな。俺からも礼を言わねえと筋が通らねえだろ」「跡部の台詞、ヤーさん臭いわ」

白いジャージ  
黒髪ストレート  
すごく美人  
すごく強い

彼女の特徴を聞かれてそう答えると「そんなんで分かるわけねえだろうが！」と跡部さんに怒られた。  
が。

「ああ、そりゃリリイちゃんなんだわ」

「リリイちゃんんじゃないかな」

「リリイちゃんしかいないでしょ」

あのあたりで聞き込むをすると、「リリイちゃん」という名前が浮上した。といふか、彼女の名前しか出てこなかつた。

「リリイちゃんで間違いないんとかいやつ?」

「すげー有名人じゃねえのか、そのリリイちゃんとかいやつ」

「」の先のボクシングジムに面するらしきね。居てくれればいいけど

リリイちゃんがよく来るといつボクシングジムで、俺たちはまた躊躇することになる。

だつてボクシングジムだよ? 怖そうな人がたくさんにそうじゃないか!

でも、跡部さんは流石と書つか・・・ためらいとなくジムの扉をくぐつた。

「」に『リリイ・チャン』とかいつ留学生はいるか?」

高らかに跡部さんをめぐらしげづげ・・・しまづいの沈黙後爆笑が起つた。

「リリイ・チャンって誰のことだよ、おめえ」

「久しぶりに笑わせてもらつたぜ、お坊ちゃんぽい見た目のクセして楽しいやつだな」

「リリイさんは留学生じゃねえよ！ ホレ、これ」

練習生のボクサーが一枚のポスターを指差す。

少し古い・・・雑誌の付録のような折りたたまれた跡のあるポスターには、見覚えのある彼女が映っていた。

「あ、彼女ですよ跡部さん！」

俺が声を張り上げると全員がそのポスターに視線を向けた。

「これは・・・」  
「え？ こいつなわけ？」  
「こりゃまた・・・」  
「・・・ウス」  
「あ～ん？ B l o o d y l i l y だと？ ぶつそうな名前  
だな」

ファイティングポーズで睨みを効かせた少女（？）の写真にはたしかに「B l o o d y l i l y（血まみれの百合）」と書かれバッタには血しぶきが散つていた。

「リリィちゃんの試合は、よくコングが血まみれになつたんスよ」

「なんでもない」とのみひたすら言つたが……それって彼女が怪我するつてこと? それとも逆のことなのかな?

「ともかく、リリイナはしばりには来ないぜ? 無理言つて神奈川から来てもらつてただけじよ、あっちにも都合つてもんがあつからな」

「かわいそうな話ですね」

「俺らも他人事じゃねえよ」

「・・・っス」

練習生たちはボソボソと暗い顔で言つていたが、「んなわけでリリィちゃんは居ねえ」と話を打ち切つた。

「あの一件はリリィちゃんに聞いているぜ。シロウトに手出しあるチンピラはクズのクズだ。きつちり事務所に話つけたし、俺らモトレーニングを兼ねて見回りすっからよ。坊ちゃんも気をつけな」  
「は、はい。それで……彼女にどうしてもお礼を言いたいですが、どうにかして連絡はとれないでしょ? うか?」

「リリィちゃんは、気にしないと思うけどなあ……。どうしていつもつづくなら神奈川の支部に行けば会えると思つぜ?」

あっちの所属だしな

そして神奈川のジムの住所を教えてもらい、俺たちは神奈川に向かうことになった。

跡部さん曰く「今日中に片付けねえとスッキリしねえ」らしい。

「わざわざ来てくださって、かえつて申し訳ありませんでした」

俺の救世主は白雪姫のよつな人だった。

白い肌。黒くて長い髪。ほんのりと赤い唇。

きているのはドレスじゃなくて白いジャージで、手にはパンチンググローブ。後ろには野次馬と化した強面ボクサー達。

「リリイちゃん、このボーヤ助けてやつたのか？」

「ふーん。チンピラに絡まれそうな顔だなあ」

「良かつたな、ボーズ。リリイちゃんが通りかかって」

「中学生だあ！？ デカイなあ坊主」

口々にそう言つ彼らは、顔は怖いけど悪い人じやなさそうだ。

「本当にあの時は有難うございました」

「気になさらないでください。あの時は本当に災難でしたね」

本当にボクシングをやっているんだらうか、と黙つてじっと穏やかな話しき。

「俺からも礼を言わせてくれ。部員が世話になつた」「・・・貴方は?」

「東京の氷帝学園のテニス部部長の跡部景吾だ」

「アトベさん? ああ! 真田リリイです。お噂は兄から伺つております」

「・・・・・・・・・兄?」

跡部さんが、いぶかしげな声を上げた。

「真田・・・・・・・・・とまもしかして真田弦一郎の、妹か?」

妹!?

真田さんは跡部さんと同じ学年だ。その妹つてことは、リリイちゃんつて俺と同じ年か、年下!?

六月さんや、忍足さんも驚いている。

そのくらいリリイちゃんはオトナっぽい。俺と同じクラスの女子とは雰囲気から違うし。

でも、真田さんも貫禄があるし・・・血筋つてことなのかな。

「真田に妹が居るとは初耳だ」

「兄も数ヶ月前までは知らなかつたことですから」

「・・・なるほど」

跡部さんははじめてか納得したようだった。

「お前の兄とは因縁があるからな。妹なり逢ひ」ともあるかもしけ  
ねえな」

「では、またお逢いしましょ!」

「ふつ、やうだな。お帰るがー!」

跡部さんは一聲でメンバーはジムを後にした。

「跡部、何が『なるほど』やねん」  
忍足さんが俺の疑問を代弁してくれた。

「あーん? わからねえのか?」  
「わからんわ!」

跡部さんはチッと舌打ちをして『下手言われるよつはマシシか』と感  
いた。

「東京のジムのポスター。あれは日本のじやねえ。おやぢア  
メリカだ」

「そついや日本語じやなかつたな」と向田さん。

「小学生や中学生の女子ボクサーなら少しほつは話題になつやつなもの  
やしな」とは忍足さん。

「ボクサーたちが言つてただろうが『他人事じやねえ』つてな。ボクサーが他人事じやねえことつったら、目だ」

「目？・・・網膜はく離か？」

「他にもあるがな。真田の妹はもう試合には出られねえはずだ。数ヶ月まで存在すら知らなかつた家族の居る日本に来た理由もそれだろう」

そういうえば「兄」も『数ヶ月前までは知らなかつた』と言つていた。

「以上だ。

不必要なこと言つて恩を仇で返すようなマネをするなよ

「了解。・・・なるほどなー。いわれて見れば納得やわ」「ボクシングやつているけど、試合は出来ない・・・？」「ラケット振つていいけど、ボールを打つちやだめだつてこと〜？」「似たようなものだな」

満足に出来ないのに、ああやつてボクシングジムに顔を出しているのか・・・。

あの夜に見た、白いジャージのリリイちゃんを思い出した。

## リリィちゃんの救世主伝説（後書き）

氷帝メンバーも勘違いをしていましたが、リリィちゃんはボクシングの試合にもですが、本業は総合格闘家です。  
ボクシングで頭突きは反則です。・・・総合格闘技でもだけ？（  
試合で頭突きつてみたことないよ？）

ココヤマサトシのトレス部（漫畫）

トレスで一番桜が好きです。

## リリィちゃんとのはじめてのトース部

黄金週間。いわゆる「ゴールデンウィーク」である。

術後や転入の関係でリリィちゃんは「学期まで学校には通えない」が、兄である弦一郎はそうではなく、彼女は「ユースで「ゴールデン・ウィーク」を知つて以来、兄の長期休みを心待ちにしていた。

「すまん、百合。連休中も部活はある」

「…………」

リリィちゃんが兄・弦一郎と口をきかぬままGWに突入した。

「もうダメかもしれん」

「そうか」

「今朝こそはと思ったが、視線も合わせてくれなかつた」

「そうか」

「俺は『好かれている』という事実に胡坐をかいていた」

「そうか」

「連休全部が合宿でないのが幸いだった。連休最終日は百合江とい  
とんつきあつもりだ」

「そうか」

「そうか」

「なんの話ですか？」

「さあ？ 最初から聞いてつけど、そっぽりわかんねえ」

赤也に聞かれて、ガムを膨らましながら返事をするブン太。

「真田君が苦惱しているようですが？」

「・・・『百合』って女の名前が出てたぜ？ 信じられねえけど、

真田のカノジョの話じゃないのか？」

「　　それは有り得ない　　」

「おおかた、近所のネコが犬じやろ」

「つまんねーけど、そななんじやね？」

「そつすよねー。副部長にカノジョとか、有り得ないすよねー」

「本当に有り得ないって言える？」

肩に掛けたジャージをなびかせて（なぜ落ちないのかは立海の七不  
思議）、我らが部長・幸村が発言し

た。

「だつて…有り得ないっすよ」  
「100%とは限らないじゃないか。『あばたもえぐせ』『割れ鍋  
に綴じ蓋』『蓼食う虫も好き好き』とか言つし」

「幸村君…それは真田君にあまりにも失禮では…  
だからさ。『田舎』ちゃんを呼べばいいんだよ」

幸村はウキウキと提案した。

「ネコとか犬なら休憩時間に構わせればいいし、それはそれで愉快  
だし。ひょっとして女の子が来たら、この先一生モノのネタじゃな  
いか」

「…・運営なんですね、幸村君」

「うん」

「ま、画面やうじやのう」

「だらうひへ・じや、オレをつそへ書つてくるかひ」

そういうてジャージをなびかせながら（やはり落ちない）、真田と  
柳の元へ向かう幸村。

立海三強はしばしの会話後、柳がどこかへ携帯電話で連絡を入れ始  
める。

「電話つてことは、人間なのか?」「  
飼い主つてことも有り得るぜよ」

そしてしばらく後、立海のテニスコートに現れたのは黒髪ロングヘアーにサングラスの女。

「はい!」

「なんですか、切原君」

「俺は、あの女の人が持っている紙袋の中に『百合』が居ると思いま

す」「小動物、ということですか」

「小動物に好かれる真田か・・・。気持ち悪いのう

「普通に考えればあのサングラスの人だろうが

「だつて、あんな美人に好かれている副部長とか、有り得ないっす

!」

「・・・お前、それ妬み入つてないか?」「

「確かに美しい方ですね」

「『百合』の正体はわかんねえけどよ。真田と知り合いなのは間違  
いないんじゃねえか? 来たんだし」

「みんな、推理は終わつたかい？」

幸村が一囃子と近寄つてきた。

「幸村君は彼女のことは聞いているのですか？」

「オレ？お楽しみは後のほうがいいかなつて、まだなんだよね。サングラスで顔は分からぬけど、

間違いなく美人だよね。

・・・フフフ。彼女が弦一郎の彼女とかだったら、ちょっとキレるよね？」

さあ、行こうか。と幸村はビクつくメンバーを引き連れてサングラスの女の元へ向かつた。

「部長の幸村といいます」

幸村の挨拶に、サングラスの彼女がサングラスを外そつとした

「そのままでいいよ。眩しいだろ？」

「・・・・・・幸村君？」

「うん。久しぶりだね、リリイちゃん」

「え！？まさかの泥沼っすか！？」  
「リリイって誰だよ。丘合じゃねえのかよ・・・」  
「丸井くん！ 敬称をつけたまえ」  
「幸村と真田を手玉にとつとむのか？」

2人の会話に他のメンバーがざわつく。

「この学校だつたんですね」

「俺も君が来るなんてビックリだよ。弦・・・真田が『百合に嫌われた』って泣き言言ってだから呼び出したんだけど・・・」

「・・・本当にですか？」

「ほら、あそこで君が来たことにも気づかないで落ち込んでいるし

指差す場所には、暗いオーラを背負つた真田。横ではやはり無表情な柳が相槌をうつつつノートパソコンを走らせていく。

「真田――！　来たよ、彼女――！」

幸村が叫ぶと、真田がバッと顔を上げた。

「ゆつ、田舎――。」

「い。」  
「土煙を立てて走りよつてくる真田。ちょっと怖

「・・・・」

「・・・ゆ、百合。まだ怒っているか?」

フルフルと顔を横にふる『百合』

「お、俺が悪かった。部活と言つても夕方には終わる。それからでいいなら、お前に付き合える。中学生であるから、夜間の外出は出来んが、家でならつ」

「家とかいやらしの?」

「夜になにするつもりつすか、副部長」

「いいえ。私がわがままだつたの。テニスを大切にしているつて、分かつっていたのに・・・」

「テニスは大事だ。だが、お前のことも大事だ!」

「・・・なんだか居たたまれませんねえ・  
「真田つてこんなに熱いやつだったか?」

「(めんなさい、弦兄様)

「・・・百合――」

「――にこさま?」

「丸井先輩、『にいわも』って兄弟の『』といすよね

「『にんたま』なら忍者だけどな」

「真田が忍者とか、怖すぎじやろ」

「真田君はどちらかといえば武将ですね  
「武将でも忍者でも怖えよ」

「何、現実逃避しているんだい、皆。大事なのはそこじゃない」

「真田が妹の存在を隠していたことが問題なんだよ……」  
幸村が言った。

「真田が妹の存在を隠していたことが問題なんだよ……」

「…………柳？」

ポン、と幸村が柳の肩を叩いた。

「柳も同罪だよ」

「待て、話を聞け。弦一郎は妹の存在を隠していたのではない。忘れていたのだ」

「普通忘れないだろ」

「普通じゃなかつた、ということだ。彼女は一歳足らずでアメリカに渡つた。日本に戻つてきたのはつい最近だ」

「…………」  
弦一郎の母親が、  
弦一郎みたいに成長するのを恐れて、海外在住の自分の妹に彼女を  
預けたつてこと?」

「そうだ。弦一郎はあまりにも幼かつたため、彼女のことを覚えていなかつたのだ」

「ふーん」

『ふーん』つてアンタ！

「顔はそこそこ似ているけど、性格は全然似ていないね。弦一郎のお母さんの判断は正しかつたつことになるのかな？」

「・・・彼女の性格は総合的にいえば、フレンドリイだ」

フレンドリイな真田・妹

「フレンドリイって、俺英語に強くないから自信ないっすけど、人懐っこいとかそういう意味っすよね？」

「お、おう？ 昭和っぽいとか武将っぽいとか、そういう意味はねえよな、柳生！？」

「あ、ありませんね」

「しかし、大人っぽいのう。真田の妹つちゅうことは、14才以下じやう？」

「「「「「」」」

「や、やつぱり副部長の妹つすよ！ サングラスとつたらおばあちゃんなんすよ！」

「それは言いすぎだろ？ 真田がおつさんなんだから、おばさんだる」

「丸井君！ 女性に失礼ですよ！」

「おばれん顔の中学生でフレンデロイとかキッシィのつ～  
「・・・」

「せりかから句を勝手なこと書いてあるのだ……。」

とつとつ真田の雷が落ちた。

「兄様、落ち着いて」

「だが！　お前のことを好き勝手に言いおつて！　ゆるせん！」「元はと言えば、私が拗ねてしまつたのが原因だし。このサングラスじゃあ仕方ありません」

そうこつて『百合』はサングラスを外した。

赤也とブン太が目を瞑る。ジャッカルは及び腰だ。  
他のメンバーは興味津々で素顔を見た。

まぶしいのか潤んだ黒目がちの瞳。

長い睫

切れ長の田じり。

ベースは真田に似ているが、真田のよつなフケ度ではない。  
13・4歳には全く見えないが、「大人っぽい高校生」くらいの範  
疇に納まる・・・まいことなき美女レベル。

「あれ？ 美人っすよ？」

「え？ フケてねえの？」

「けしからん！…！」

真田が赤也とブン太にゲンコツを入れた。

「やつぱり兄妹なんだね、目元が似ているよ

「お兄ちゃんに似ず、フケなくてよかつたのう」

「眩しいのでしたら、気を使わずサングラスを着用ください」

ありがと「ざこ」ます、と彼女はサングラスを再びつけ、紙袋を差し出した。

「差し入れです」

「ありがとう、リリイちゃん」

幸村が受け取り、二人はしばらく見つめあう。

「 「 「 「 「 なにこのへんな雰囲気」 」 」 」 」

「 弦一郎は『百合』って言つてたよね？」

「 あれは弦兄様専用のあだ名みたいなものです。外来読みは照れる  
らしくて・・・」

「 そりなんだ。ってことは、真田リリイちゃん？ ・・・やつとフ  
ルネームが分かつた」

「 はい。ゴールデンウィーク後に編入試験を受けて、合格すれば2  
年生になります」

「 もともと何処にいたの？」

「 アメリカのニューヨークです」

「 じゃあ、英語ペラペラなんだね。同じ年のそこの赤也は英語がダ  
メダメでね」

「 今、関係ないじゃないっすか！――！」

「 私も恥ずかしながら古文がダメダメです」

「 あはは。安心してもいいよ。赤也とそここの丸井もダメダメだから」

「 「 関係ないだろい（つすよー）」 」

リリイちゃんはクスクスと笑つた。

「 弦兄様のお友達は、楽しい方が多いのね」

「 む・・・」

「 お邪魔でしょうし、私はこれで失礼いたします。今夜は兄様の好  
きなものを私が作りますね」

「弦一郎の好物は焼肉だから、腕の奮い甲斐がないよね」

「真田ん家、今日焼肉かよ。いいなあ～」

「同感つす

そしてリリィちゃんとトース部の出会いには無事に終わった。

その後、ちょくちょく幸村が真田家を訪問したり、仁王がリリィちゃんの話題を振つて真田をからかつたりなどの変化はあったが、彼らとは良好な関係を結べたと言える。

## リリィちゃんとはじめのトース部（後書き）

柳が一次元に居たら、魂を売り渡してもいい。好みすぎます。中学生なのに。

## リリイちゃん、女帝になる

リリイちゃんは兄・弦一郎の弁当を持って立海大附属中学校へ向かっていた。

真田が忘れたわけではない。

家電製品の悲劇というやつだ。

夜に停電があつたらしく、タイマー炊飯していたのに朝から稼動しなかつたのだ。

真田は学食で済ます、と言つたのだが「お冷」ハンが残っちゃうー」と母が嘆き、「じゃあ、私が配達します」とリリイちゃんが立候補した次第。

待ち合わせは12時30分。校門前。  
兄・弦一郎が門に来てくれる予定だ。

昨晩に停電があつたことで炊飯できなかつたこと。  
その日が立海の委員総選挙日であつたこと。

偶然である（断言）。

「へえ、リリィちゃんが来るんだ」

「ああ、悪いから断つたのだが、散歩ついでだと言ってな」

幸村が好奇心に田をキラキラと輝かせながら柳を見る。

「ねえ、とてもいいことを思いついたんだけど？」

「奇遇だな、幸村。俺もだ」

「じゃあ、許可を学校に貰わないといけないね」

「一学期からリリィちゃんも、この学校の生徒だ。先生方も許可してくれるだろ?」

「・・・・何の話だ?」

委員総選挙がある今日のメインイベントはミス・ミスターコンテストである。

選ばれた男女は、親善大使として各学校に派遣されたり、いろんな催し物のプレゼンテーターなどをこなすことになる。

男子はミスを選び、女子はミスターを選ぶ。

得てして、男の選ぶ女というのは、女子の「嫌いなタイプ」であることが多い。

今回の当選確実といわれている、ミスター立海は幸村。

女子は山代がかたい、と言わっているのだが・・・これまたステレオタイプで「女子の嫌うブリッコタイプ」なのだった。

幸村もこの手の女子を大いに嫌悪しているので、一緒に選ばれるのは金を詰まれても遠慮したいと思っていた。

いざとなつたらミスターの権利を返上しようかなーと思つていたところ、お気に入りのリリィちゃん訪問である。

リリィちゃんなら大歓迎。

「リリィちゃんの推薦人には俺がなつ。彼女はボランティア活動にも熱心だし、容姿も山代を遙かに上回つてゐる。冷静に考えれば彼女のほうがふさわしい」

「うん。俺も冷静に考えるよ」と、全校生徒に言つておくよ

そつとして幸村の希望と柳の手腕により、リリィちゃんのミスコンへの参加は、本人の意思には関係なく決められつつあった。

真田リリィ 二学期に一年に編入予定。

身長176センチ、体重55キロ

趣味は特技は総合格闘技。全米ジュー・アボクシング女子3位の実績有り。

昨年度の「ジュー・アボクシング・全米版」にランクインするオリエンタルビューティ。

現在は編入に向け、勉強をしつつ老人ホームでのボランティアを日課としている。

ガールスカウト、ブートキャンプの経験アリのスポーツ万能な帰国子女。

日本語・英語のほかに、広東・ドイツ・フランス語の日常会話が話せる。

現在はスペイン語を取得中。

事故により総合格闘技より引退。帰国。

「こんなものだらうか」

「・・・こんなもんつつか、ミス日本にも選ばれるレベルじゃな  
いつすか、コレ」

「ミスつづりミスコンぽくないか?」

「リリイちゃんてすごかつたんだな」

「これで山代が選ばれたら八百長じゃなか?」

「おい、何故百合がミスコンにエントリーされるのだ!」

「俺が決めたからだよ」

「先生方もこの推薦文を読んだら、快く許可してくれた」

「立海のPRにもなる実績ですからね」

「私立は怖いのう」

そして案の定、観たこともない『真田リリイ』に票は殺到。幸村の狙い通り、ミスに選ばれたリリイちゃんは・・・。

校門で兄だけでなく、全校生徒に迎えられた。

「あれが！」  
「うお！ マジで美人！」  
「格好いい系？」  
「真田君に似ているけど、ちょっと優しい感じね」「あの子ならいいわ」  
「山代と比べたら誰でもオッケー」  
「年齢詐称気味なのは、兄妹ってところかな・・・」「「「プツ」」

「今からパレードもあるんですか、弦兄様」  
とうあえず、と兄に弁当を渡しながらリリイちゃんが尋ねる。  
「い、いや・・・」  
いつになく歯切れの悪い真田。

「やあ、リリイちゃん♪」  
「幸村さん、4日ぶりですね」  
「そうだね、久しぶり」

「（4日ついで・・・何だ？）」  
「（部活の後、精市が自宅に寄つたのだ）」  
「（そりや、リリイちゃん弁当でじやの）」

「実はね、リリイちゃんが今年のミス立海に選ばれたんだよ」

「…………あの、私まだ編入していませんけど？」

「そんなの些細な問題だよ。リリイちゃんの生き様に真心を打たれてね。君を学校の中心として今後ボランティアに力を入れようつてことになつたんだ」

「やうなんですか！」

リリイちゃんはいたく感動したようだ。

「日本の学生がそれに参加してくれたら、各国の仲間も喜びます」

すごいグローバルなことを言い出した。

気軽に彼女に投票したことが逆に気まずくなる学生は少なくはなかった。

「学生の身でやれること。とこうことで着なくなつた衣料・使わない筆記用具、食べない使わない贈答品の寄付を中心に行っています。みなさん、」協力をお願いいたします」

深々と頭を下げるリリイちゃん」「……これ、いかがいたりまつ」と礼を返す生徒達。

「でも、ミスの件は謹んでお断りいたします  
「なんですか？」

ダークサイド

幸村の暗黒ダークサイドにもケロコとじてコリコリちゃんは明朗に返事をする。

「ミス立海に選ばれるかたは、品行方正で、やはり愛校心のある方が選ばれるべきです。私は編入予定とはいって、まだ立海のことを何も知りませんから」

ぐうの音も出ない返答である。

リリイちゃんが断つたことによつ、ミスは決めなおしつたわけだが・・・。

「品行方正で愛校心つて・・・山代じゃないな  
「あいつ、男遊びはげしいもんな」  
「制服は改造だしな」  
「生徒会の役員あたりがよくねえ?」

という会話が男子の中であり、生徒会書記の富野さん（女子に好かれるタイプ）が選ばれました。

リリイちゃんはといえば・・・。

「彼女はクイーンだよな」

「ミスとか、ちょっと格が、な」

「女帝つてカンジ。皇帝・真田君の妹だし」

「クイーンつてことにしょづぜ」

さらに、リリイちゃんに傾倒した宮野さんが「親善大使はリリイちゃんがふわわしい」ということになり、各校にリリイちゃんがいくことになるのは別の話。

## リリイちゃん、女帝になる（後書き）

中身は成人女性ですし、人種の垣壻<sup>つるは</sup>・自由の国アメリカでそこそこ辛酸は舐めています、リリイちゃん。  
神の子だって、理路整然と撃破しちゃいますよ。

## リリィちゃんど、ボーラーフレンズ達（前書き）

久しぶりの投稿な上、オリキャラばかり出てきて本当に申し訳ありません。

リリイちゃんど、ボーアフレンド達

アメリカに居る叔母から荷物が届いた。

百合が開けると、その中には、英語の本や洋楽のCD、服やアルバムなどが入っていた。

本を一冊手にとって捲つてみれば、全て英語だ。

「…………英語か？」

『e』という一文字の英語のスペルなどあつただろうか？

「弦兄様、それはイタリア語の本よ。英語なら、これがいいんじやないかしら」

「…………（パラパラパラ）百合せざうやつて語学を習得したのだ？」

「ボーイフレンドを作るのが手つ取り早いわ」

バリッ

ペーパーブックとはいえ、真つ一つに本を裂いてしまつた真田弦一郎15歳。

「妹にボーイフレンドが複数いたのがショックなのか、妹に先を越されたのがショックなのか、どっちだ？」

「百合に恋人が居たことがショックだったに決まっているだろうが！」

柳が指を折りつつ述べた。

「現在リリィちゃんが取得している言語は5・5ヶ国語。うち、日本語と英語は自然に覚えたとして・・・4人か」

「アメリカ人とも付き合つたことあるんじゃねえ？4人以上だろ。仁王もビックリの恋愛遍歴つてヤツ？」

「俺はガイジンさんとは付き合つたことないのう。さすが、リリィちゃんはグローバルじゃ」

「なあ」

ジャッカルが首をかしげた。

「ボーイフレンドだろ？ 直訳したら男友達じゃねえか。ステディとは別なんじゃねーのか？」

「ステディって何すか？」

「恋人という意味だ」

「弦一郎みたいにグダグダ考えこんでいないでリリィちゃんに聞けばいいじゃないの？」

神の子の一聲で、一行は真田家にお邪魔し、「リリイちゃんにボーアフレンドが居たことがショックな、ブラコン弦一郎に止めを刺してやつてくれない?」と話を持ちかけた。

「弦兄様・・・おっしゃってくれれば良かつたのに」

リリイちゃんは、アルバムをドサッと積み上げて、苦笑した。

「勿論、男友達って意味で使ったんですよ。・・・ホラ」

リリイちゃんがアルバムをひらいて見せてくれたのは・・・・8歳くらいのリリイちゃんと、黒人の男の子。

「彼はエドアールと言つて、フランス系アメリカ人です。私が日本語、エドがフランス語を教えあいました。

今、彼は高校でバスケをやっています。ディフェンスだったかな。身長もうんと伸びていてフフィートにもうすぐですって

「フフィート?..?」

「1フィート=30センチで計算してみる」

「7かける30・・・210・・・・2メートル10丈!..?」

巨人じゃないですか! 赤也が叫んだ。

「で、彼がサルバトーレ。イタリア語を教えてもらいました。モテルの卵なんですよ。小さいころからスタイルがいいでしょう?」

赤毛の少年を指差してリリイちゃんが言ひ。

「じゃー、」Jの男の子は？ 男の子つていう大きさじゃないけど「彼は・・・・・ジュリオ。私達のリーダー格で、スペイン語を教えてもらいました。」

「聞くやつ全員スゲーんだけど」「リリイちゃんもジユニアでは名前の知れたアスリートじやからう。そういう人間があるまるんじやなか？」

「Jのあたりの男の子の群れは？」

幸村がなおも聞く。

「彼らはブートキャンプで知り合つた子たちの中で、格闘系の子たちですね」

「頭に刺青しているね（笑）

「そういう子、結構多いですよ。女の子も・・・」

アルバムを捲ると、血だらけのシャツをきて、片目をブックリと腫らし、満面の笑みを浮かべて、ゴツツイ少女を肩を組んでいるリリイちゃんが現れた。

「」、「これは・・・」

「試合の後ですね。こめかみにパンチをかすっちゃって。深くなかつたんですが、出血が酷かつたんです。

これだと私が負けたみたいな写真ですが、かるうじて勝ちました」「え！？ このメスゴリラに勝ったのっ！？」

「・・・・・マルガリー テは私の大事な親友です。・・・アカヤ締めるよ？」

キュッ

「ウツ！ マジでシマルッ！」

結局、真田がグダグダと考えすぎていただけで、友人止まりの男達と言語を教えあっていたらしい。ということだった。

「なんか腑に落ちない

「俺もそう思うナリ」

幸村と仁王だけが、兄に負けず劣らずブラコンなリリイちゃんの、思いやりからくるウソを見抜いた。

## リリィちゃんと、ボーイフレンド達（後書き）

リリィちゃんはHレメンタリースクール（幼稚園）の頃からBFが途切れたことがありません。が、現在フリー。真田に夢中だからよつて、日本男児な真田には言わないほうが多いと判断し「男友達」という言葉に逃げました。

リリイちゃん、編入試験に合格する（前書き）

お久しぶりです。

## リリイちゃん、編入試験に合格する

リリイちゃんの編入は一学期からに決まった。

無事に立海大付属中学校の編入試験に合格したのだ。

「とはいえ、国語、古典はギリギリ、日本史は合格ラインのはるか下だったと先生に伺った。

5ヶ国語が堪能であることと、スポーツ実績による、留学生待遇での合格ということだ」

産まれて数ヶ月でアメリカにわたり、アメリカの教育を受けてきたリリイちゃんなので、日本史なんて「ノブナガ・オダ」くらいしか知らないし、古典を読むより中国語のほうが分かりやすいといった具合だった。

今後は補修で、弱点科目を補うことになるといつ。

「俺も及ばずながら協力しよう」

日本史は得意中の得意である兄にやせしく言われ、リリイちゃんはぎゅっと弦一郎に抱きついた。

「お兄様、大好き！」

「アカヤには負けたくない、と百合も意氣込んでいた  
「赤也もリリイちゃんに負けないようにならんばれよ」  
「腕つ節は負けているもんな」  
「英語は当然、ムリだしな」  
「座高は勝つているじやろ」

「座高は先輩方も勝つてるでしょうがーーー！」

「　　・・・・・」

## リリイちゃん、編入試験に合格する（後書き）

実は話のストックがなくなってしまったのでした。長編（合宿編、ドキサバ編）は中途半端だし・・・がんばります。

リリィちゃんと、同じ年の男友達（前書き）

「無沙汰しました。一日連続で投稿予定です。また一回田～。

## リリイちゃんなど、同じ年の男友達

「編入前から話題だから、皆知っていると思つが・・・」

「　　「　　「　真田リリイちゃん！――！」　　」

生徒がハモつた。

「　・　・　・　そうだ。皆仲良くなるんだぞ」

(　・　・　・　同じクラスかよ)

リリイちゃんに妙に苦手意識を持つていてる赤也だけが苦い顔をした。テニス部の先輩達の関心がリリイちゃんに向いていることが、苦手意識の根っこにあるのだが、本人は気付いていない。よつするに、寂しいのだ。

同じクラスになつたと先輩達が知れば、伝達要員になるだろう。いや、もしかしたら彼らがじきじきにやつてくるかもしれない。そして、ついでに自分をからかうかもしれない。

そうだ！　こいつの口から俺のヤバい情報が副部長に伝わる可能性だってある。ということは・・・制裁の回数が増える！  
（ゲンコツ）

マイナスのことばかり頭に浮かんだ赤也はリリイちゃんを睨んだ。すでに赤也のことは知っているリリイちゃんは、赤也と視線があつたので、パチリとウインクをした。

総合格闘技で相手選手と俗語スラングまじりの罵倒合戦 血まみれの戦いを繰り返していたリリィちゃんにとって、赤也の睨みなど、仔犬の甘噛み程度のほほえましいものだ。

リリィちゃんのウイーンクにクラスメイトは悲鳴を上げた。

「ん？ そうか。切原とは知り合いなんだな。よし、隣の席にするか！」

「アカヤ！ 宜しくね」  
「・・・・（マジ最悪）」

ホームルームが終わると赤也の席・・・の横のリリィちゃんの席には人だかりが出来た。

「うちのクラスになつてくれてラツキー！」  
「ねえ、リリちゃんつて呼んでいい？」  
「アメリカの中学校つてどんなカンジ？ やっぱり大人っぽいの？」  
「英語ペラペラなんだよな？」  
「ばつか。フランス語とかもペラペラつて（〃スコンのときの）紙に書いてあつたろ？」

横の赤也がウンザリするからこゝだらない質問に、リリィちゃんは  
卒なくこやかに答えていく。

「だ――――――！　おい、副部長妹――！　校舎案内すっせー。」

結局、ガマンできなかつた赤也がリリィちゃんをつれてクラスを飛び  
出したのだが・・・。

「おい、あれつて・・・」  
「テニス部の真田先輩の・・・」  
「リリィちゃんんだよね」  
「うわー。背高い。顔ちつちゅー！」  
「脚も長いし、胸もおつきいよ～。本当に中学生？」  
「モテルみてえ。うちの制服が格好よく見えね？」

ひそひそひそひそひそひそ

クラスからでも注目の的で、ひそひそひそひそ話され、廊下を進  
むたびに赤也のイライラ度が増してきた。  
そして目も次第に充血してきて・・・。

「Hey、アカヤ！ あと10分しかないよ。とりあえず近いところだけ教えて。あとは昼休みねー

うだけ教えて。あとは昼休みね。

「なんで昼休みも俺が付き合わないといけないんだよっ！」

「田舎の中学校は先輩に馴れ馴れしい」とイジメられたって聞いた

卷之三

「語がよくなこと書いたの」

「アメリカの友達。まず同じ学年と仲良くなつたほうがいいって。

私の友達皆さん上だから、同じ年はアカヤが初めて上

「アーティストの心」

アカヤ

1

「ああいう質問はツーカ儀礼だけど、ちょっと面倒って思つてた。  
助けてくれたから、アカヤは優しい」

リリイちゃんは一ツコリ微笑んで赤也を持ち上げ、グルグルまわした。

ちなみに、リリイちゃんは赤也より数センチだが高い。

۱۰۷

「友達のシルシだよ？」男友達が出来たら、グルグルするといつて聞いた。永遠に友達」

そりやあ、女子に「高い高い」されて恋が芽生える男子は少ないだろう。行つて友情止まりだ。

「おい、いい加減下ろせっ！」

「アカヤ照れてるー。大丈夫、重くないよ？」

「おまつ！俺に失礼だぞ！」

「うん。ハッキリ言ってくれるほうが、分かりやすい」

そしてリリィちゃんは、「まずはフロアの端からっー」と、暴れる赤色をものとせず、肩に担ぐと悠々と歩き出した。

その豪快さと怪力に、遠巻きに二人を見ていた2年生もポカンとしちゃった。

## リリイちゃんと、同じ年の男友達（後書き）

リリイちゃんは、ヒソヒソ話す2年生ズに対しても「ハツキリ言つてほしい」と暗に示してます。

なので、声は普通より大きめ。

そして、「アメリカの友達」はフラグ折りの為に、リリイちゃんに『日本人の男女友情』を説明しています。

リリちゃん補足・・・胸がデカイ（笑）

中学生だし？ とりあえずDで。今後は未定。

ちなみに私はBくらいが良いと思います。デカいと第三ボタンあたりがエラ（エロ？）になるし。

つりやがん部員? しなる(前輪)

連日投稿2回目です。

## リリイちゃん部員?になる

リリイちゃんが無事立海大付属中学校の生徒となつてからのこと。

「兄様を待つている間私もトレーニングしていくつかまいません?」「部員の邪魔をしないなら問題なかろう」

そういうわけで、リリイちゃんがテニス部の練習に加わった。

「いっそ、マネージャーにならないかい?」

テニス部の活動の横で入念にストレッチをしているリリイちゃんを勧誘したのは、部長の幸村。

彼がリリイちゃんを勧誘するのは今回が初めてではない。

兄・弦一郎との帰宅を望むリリイちゃんが部活終了を待つことは以前から多く、それでなくとも彼女を気に入っている幸村は彼女へのちょっかいを毎日欠かさない。

キレイな容姿に、一年連続全国優勝の男子テニス部を率いる部長。彼の言動はいつでも目立つ。しかも、ちょっかいをかけている人物が、『あの』真田の妹。しかも帰国子女でフレンドドリー・・・といふ「本当に真田の妹なのか!?」「いやでも顔は似ているし……」と物議を呼んでいる有名人リリイちゃん。

毎日目立ちまくっているので、『幸村がリリイちゃんをマネージャーに勧誘している』といつ噂、否、事実はあつという間に広まった。

しかし、当のリリイちゃんはとこづと…

「皆さん真剣にテニスに取り組んでいらっしゃるのに、素人の私が  
参加するわけにはいきません」

と至極最もな理由で、幸村の勧誘を断り続けていた。

が、兄・弦一郎を待つ間、自分が練習中の部員の集中力を欠かせて  
いる、と彼女は気づいた。

邪魔をすることは本意ではなく、気づいた当日から彼女は部活終了  
を待たずに一人で帰ることにした。

そして初日はナンパ男たちに囲まれ警察がくる騒動となり。その次の日は駅前でスカウトされているのを目撃され、さらに一週間後にはスカウト団が校門前で彼女を待ち伏せ。それが噂となり、さら  
に翌日は見物客が押し寄せ…。

「お兄さんを待つて、帰宅しなさい」

と校長自らリリイちゃんに進言し、一人で帰つたりリリイちゃんが気  
になり別の意味で練習に身が入らなかつた兄の現実も問題としてあ  
つたわけで…彼女は再び部活を待つ身となつた。

が、根本的解決はされていない。やつぱり部活の邪魔をするのはい  
やだな…・・・と思つたりリリイちゃんは、

いつそのこと参加してしまおつ。

と思い立つた。もともと運動は好きだ。なんたつて元格闘家だ。

リリイちゃんは部員（&野次馬）がビックリするよつな柔軟性でストレッチを終え、部員に混じつてランニングを始めた。  
校庭十周。一周500メートルだから、5キロという単純計算。  
部員はダッシュ＆ジョギングを繰り返しながら5キロ走破する。ダッシュの距離は人それぞれ。限界に挑み、なおかつ体力を養うのが目的だ。

「ムリは禁物ですよ、リリイさん」

「ありがとうございます、柳生先輩。でも毎日走っていますし、5キロくらい軽いですよ」

「そ、そうなのですか……？」

心配した柳生をよそに……リリイちゃんは完走した。レギュラー並みの時間で。

しかもその後素振りを始めた部員に「もう少し走ってきます」とコートを飛び出していった。

7分後、14分後、20分後。リリイちゃんはコートの前を颯爽と走り去り、25分後にコートに戻ってきた。

「……タイムが縮んでいるな。感心すべき体力だ」

柳がデータブックに何か書き込んでいる。

クールダウン中、リリイちゃんは一人の部員が気になつた。足をかばつているように見える。

モジヤモジヤの黒髪。クラスメイトの赤也だ。

リリイちゃんの視線の先に気づいたのは兄の真田だった。彼もすぐに赤也の異変に気づく。

すぐにトレーニングをやめ保健室へ行くよつに進めるが、ガンとして拒む赤也。

「悪化してからでは遅いのだ！ 立海レギュラーとして自覚と責任を持って！」

兄の渴で、リリイちゃんは赤也が念願のレギュラーになっていたのだと知る。

捻挫といつものば、長引くものだと彼女も経験上知つていた。

「兄様、私がアカヤを保健室に連れて行きます  
「頼めるか、百合」  
「勿論です。責任を持つて治療するまで見ています」  
「へつ！ 副部長の妹だろうが、俺が素直に行くとはおもわねーことだなつー！」

兄に頼まれやる氣倍増のリリイちゃん。

「アカヤ、抵抗するなら氣絶させてでも連れて行くよ。氣絶させるのも大得意だし、お姫様抱っこして校庭を横切つて欲しい？」

「…………」

「そりゃいいのう。俺は見てみたいぜよ。お姫様抱っこされる赤也」「俺も見たいなあ。気絶の仕方も教えて欲しいし。赤也、ちょっと氣絶させられてみてよ」

仁王と幸村も集まってきた。幸村は「気絶の仕方」など教わってどうするつもりなのか？ きっと毎日部員を気絶させて遊ぶに決まっている。

「…………行けばいいんじょ」「あまり動かさないほうがいいから、おんぶする?」「や、やめてくれよー！」「でも……」

「なら、コレで運べばいいだろ！」

丸井が部室の横の台車を指差した。

「それはいい方法だな。双方の負担も減らせる。赤也、乗れ

「氣絶・お姫さま抱っこ・おんぶ・台車……」の選択肢であれば、誰だって台車だろ？。

「…………ちーつす」

しぶしぶ台車に座る切原。リリィちゃんは取つ手をつかむと「ローラーと運搬していった。

保険医は不器用だった。

シップを繕れさせただけなら」「嬌だが……。テープリングも繕れており、しかも緩い。

「あれ……あれ?」

切原の目が充血してきた。兄に聞いてこれがヤバいと知っているリリィちゃん。

「先生、私にさせください。テープリングはハードタイプとソフトタイプの一種類出してもらえますか?」

「あ、やつてくれるの? ありがとー」

昔取った杵柄である。

リリィちゃんは関節を固定し、最小限のテープリングでキッチリと固定すると、冷却スプレーと氷の入ったバケツを貰い、再び台車に切原を乗せた。

「・・・テープリング上手いのな」  
「私もスポーツをしていたもの」  
「知ってる。・・・ボクシングだろ?」  
「総合格闘技」  
「K-1とか、そういうのか?」  
「まあ、そういうのもやってた

「・・・・・・・・・・・・

聞きかじつた話だと。

交通事故で彼女は目と耳を怪我し、選手生命を失ったといふ。それまでは「ブラッディ・リリイ」とか「魔界のプリンセス」とか言われる最強の選手だつたらしい。・・・そのあたり兄似というより部長似じゃないかと赤也は思った。

赤也はテニスが好きだ。

捻挫したのを隠して練習したいほどに。  
でも、捻挫は治る。

けれど、彼女の目と耳は治らない。

実際には目は角膜移植でほぼ完治し、耳は左耳が難聴の気がある程度まで回復している。

彼女は選手としてリングに立てないと言つたほうが正しい。

そこらへんの細かいところは赤也には分からぬが、「ものすゞく  
辛いんだろうな」ということだけは分かる。

レギュラー並みに体力があつても、もうボクシングは出来ない。

・・・あれ？ テニスは？？

「おまえさー、テニスしてみれば？」

「え？」

「副部長の妹じゃん。運動神経よわよわだし、男並みに体力あるし。

やつてみればいいじゃん。副部長だつて喜んで教えてくれるだろ？ 部長もだし。…おれも教えてやるしよ

「テニス・・・」

「全然やつたことないのか？」

「友達の家でちょっとプレイした程度なり」

「しばらく筋トレくらいしか出来ねえし、俺が教えてやつからよ…」

「え、でも・・・」

「決まり！ 礼はテーピングでいいからな！」

そして。

切原がリリィちゃんにラケットを持たせ素振りさせているところをジャッカルが目撃。 丸井にバレる 部員全員に伝わり。

「素振りなんてつまらないよ、ちょっとフローしてみようか？」

と幸村により「一トに立たされたリリィちゃん。

「ふむ。ボクシング仕込みのステップというのか？ 俊敏さは申し分ないな。動体視力もクリアしている。体力・パワーも女子としては超高校生並みだ」

ガツ！

ギュイ——ツ！

「グボツ！」

「ああつ！？ ジヤツカル先輩申し訳ありません――！」

「・・・問題はボールコントロールだな」

「スイートスポットどころか、枠に当てているぞ」

「すげー音だな。150キロくらい出てるんじゃないのか？」

「あ、今度はグリップに当てた・・・」

「ゴツ！」

「ギュルルルル・・・」

「ガシャツ！！」

「フェンスにめり込んでいますね」

「・・・ピヨ」

「リリィちゃん、ラケットの角度が悪いよ。もう少し下を向けて。。。さつきは枠で今がグリップだったから、次はスイートスポットに当たられるよね？」

「ゴツはつかめたと思いますが。。。皆さん流れ玉に注意してください」

「フフツ、大丈夫だよ。立海テニス部にテニスボールで怪我するな

んてみつともないヤツはいないから 「

だがしかし。

リリイちゃんにトースのセンスがないと分かるのに時間は掛からなかつた。

「そういうえば道具を使うスポーツって苦手でした」

「え？ リリイちゃんって実は不器用？」

## リリィちゃん部員?になる(後書き)

よし、これでストックが書きかけの「ドキサバ編」と「合図合宿」だけになつた!

週末に妄想をカタチにして、来週投稿したい、な。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

第一話以来の、リリイちゃん視点です。

## リリイちゃんどキドキサバイバル？

嘘みたいですが、遭難しました。

きつかけは「立海男子テニス部合宿」

学校所有の合宿場が老朽化の為立替え中といつことで、「今年はどうするべきか?」と弦兄様が頭を悩ませていたので相談を受けたこと。

「百合は日本に来てまだ間もないし、充てはないだろうが…話を聞いてもらひだけでも違うものだな」

そう弦兄様はおっしゃって、私の頭を撫でてくれたけれど・・・。

「まかせて！ 充てはあります！」

弦兄様の悩みを解決して差し上げたい！ と思つたし、本当に充てがあつたの。

私は兄様の前で「山本さん」に連絡をした。

『リリイ様でいらっしゃいますか？』

「はい、お久しぶりです山本さん。ご主人はいらっしゃいますか？」

『あいにくまだ戻つてきておられません。私でよければ言伝をしておきますが？』

「たすかります。タローさん、国内に保養所を何箇所かお持ちとかがつっていました。单刀直入に申し上げると、近場で一つ、一週間ほどお借りできないでしょうか？』

『それでしたら問題はないと思います。常々管理人を在住させてい  
るだけで、使い道がないところとしておられます故、リリイ様のお願  
いでしたら』快諾いただけるかと』

「ありがとうございます。テニスコートが2面はある場所がいいの  
ですが?」

『その点も安心を。タロー様とテニスは切つても切れない仲でござ  
りますから』

山本さんは『後ほどタロー様より連絡申し上げます』と言つてく  
れたので、電話を切つた。

「百合・・・山本さんやタローさんは、一体誰だ?」

「ボランティアで知り合つた、篤志家の。私が怪我をしたときも  
わざわざアメリカまで来てくださいましたよ」

「そうか。兄として礼を言わねばならん」

「もてあまし気味の保養所を貸してくださるって約束してくれたわ。  
部活の皆様にも連絡してさしあげたらどうかしら?」

「そうだな。あてが出来たと連絡しておいで」

その夜、タローさんから連絡があつたんだけど…。

「お兄様、ちょっと困つたことが・・・」

「保養所の件がダメになつたのか? 残念だが仕方あるまい」

「そうじゃないの。ちょっと・・・というか、かなり大きいみたい  
なの」

それでタローさんが、自分の教え子達も呼んで共同合宿はどうかっ

て言つてきたのだ。

私が参加するわけじゃないし、保留にしてもひりつたんだけだ……。

「タローさんとやうは、どこの学校のテニス部の顧問なのだ？」

「ヒュー・ティー学園とおつしゃつていたわ」

「氷帝…」

あ、驚いている。弦兄様がご存知のところとは有名などいろ  
なのね。

「跡部のところか……。あの学校の実力は疑いようがないが……。  
精市と蓮二に相談してみるか」

「兄様、ヒュー・ティーとセイガクはどうが強いの？」

「どちらも全国区の学校だが……百合、お前……」

「あのね、兄様。保養所は50人は収容できるんですって。コート  
も8面あるらしいの。この間国光さんに聞いたんだけど、セイガク  
のテニスコートは整備中で使えないんですって。誘つてみたらどう  
かしら？」

「……ふむ」

弦兄様が部活の方に連絡をし始めたので、私も国光さんに電話して  
みることにした。

「立海と氷帝との共同合宿？」

「そう。期間は一週間。どうかしら？」

「こちらは願つてもないことだが……。関係のない俺たちが参加  
してもいいものなのか？」

「試合で逢つたことがあるのでしょうか？　問題ないと私は思います」

日本人って謙虚ね。

そうして合宿が決まったのだけど・・・。想定外なことに私も参加することになってしまった。

「氷帝の監督を動かした百合が行かないのは本末転倒だろ？

そう弦兄様に言われたし・・・確かに退院してからご挨拶すら伺つていないし・・・。行くべきかも？

そして集合場所の東京湾で私たちは豪華客船に乗せられて目的地に向う予定。

・・・近場つて国内よね？ パスポートは用意していないんだけど・・・

「ミス・リリイ！」  
「ミスター・タローー！」

港で。私は久しぶりのタローさんとの再会。彼の広げた腕に飛び込んだ。

「元気そうで何よりだよ、ミス・リリイ。病室の君を見たときどれ

ほど胸を痛めたか・・・

「心づくしの見舞いの品、ありがと」「やせこぼした//」

「私のことは昔と変わらずタローと呼んでほしいね。犬のタローはどうした?」

「『めんなさい、日本にはつれて来れなくてあちらの友達に預かってもらつているの』

「・・・わうか。それは寂しいことだな」

再会の挨拶が終わつたら、弦兄様を紹介する。と言つても、一人ともお互いに存知だつたみたい。

『君が』『あなたが』とか驚いていたし。

弦兄様がタローさんを部活の方に紹介しているのを見ていたら「おい」と声を掛けられた。

振り返ると、とてもキレイな男の子。・・・といふか見覚えが。

「あの時の・・・」

「プラッティ・リリイか!」

いやだわ。あの呼び名がヒヨーテー学園に流通しているなんて。

「真田リリイです。リリイと呼んでくださいね?」

ショイク・ハンドで挨拶していると、メガネの男の子やおかっぱの男の子やらが集まってきた。  
やつぱり、全員見覚えがあるんだけど?

「姫さん、久しぶりやな」  
「クソクソ!お前ちつとも連絡しねーじゃんかよ!」  
「つーか、誰か連絡先教えてんのかよ?」

「ひつ久しづりだねリリイちゃん！」

「ウス」

「話に割り込むな！……」

皆さんと一通り再会のご挨拶をしていたら、キレイな男の子がキレた。・・・ああ、跡部君って名前だったわね。

「監督と知り合いか？」

「元スポンサーで、今でも親しくさせていただいているわ」

「監督は、ボクシングにも興味があつたのか・・・」

「ボクシングもしていましたけど、総合格闘技です」

「ここの大事ですから。私はどちらかというとキックボクシングから派生して総合格闘技に入つたのだし。

「あそこに見えるのは、姫さんのお兄ちゃんやな」

メガネの人・・・オヒタシ（違つ）さんが弦兄様をみて呴いた。

「皇帝真田の妹とか、今でも信じられへんわ」

「ええ。私もあんなすばらしい兄様の妹だなんて、自分の幸運が信じられません」

「　　・・・・・」

「おい、本氣か」

「高度な笑いやな。関西人も突つ込めんわ」

「リリイってブラコンか？」

( ( ( 真田の妹がブラコン・・・ ) ) )

ヒヨーテーの方たちがザワザワしているのを無視して、弦兄様の頬もしい背中をみていたら、年上の友人を発見。

「あ、国光さん！」

「「「国光さん（だと）？？」」

白と青を基調としたジャージの中に国光さんを発見。ヒヨーテーの皆さんに『それでは、また』と挨拶すると彼のほうへ向かった。

「リリイ、今日は招待してくれて感謝する」「お礼の先が間違っているのでは？」  
「そうだな。榎監督にも改めて言うつもりだ」

相変わらず『氣難しい顔をした国光さんだけ』、彼のデフォルトだし、気にしない。

彼の肩越しに学校のメンバーらしき人と目があつたので、水を向けた。

「副部長の大西だ」

「はじめまして、大西です。君は真田の妹さんと聞いたけれど・・・

「ええ。真田リリイと申します。今回の合宿には無関係なんですが、ご一緒することになりました」

「関係者じゃないのに、参加してんの？」

「ボソッと言つたのは小さな子。

白い帽子に大きな目・・・。

「ジュニアテニスのエチゼン？」

「・・・なんで俺を知つてんの？」

「ワシントンで一緒にしたじゃない。忘れちやつた？」

「・・・・・リリイちゃん」

あ、思い出してくれたみたい。

「久しぶりね。日本に来ているなんて知らなかつたわ」

「そつちこそ。テニス始めたなんて知らないし」

「怪我で引退しただけよ。テニスはルールも知らない」

「・・・ふーん。ま、あなたなら邪魔にはならないよね」

「相変わらずビックノーズね。エチゼンは」

「リヨーマでいいよ」

「そう? エチゼンって発音気に入っているんだナゾ」

「あんたがリヨーマって言わないと、俺もリリイって言つこいくじ  
やん。兄貴も居るみたいだし」

「それもそうね」

「なになにー? おチビと知り合ー?」

頬にバンソウ「ウをつけた可愛い男の子がリヨーマに飛び掛ってきた。  
話に乱入してきた。

「アメリカで、昔」

ジュニアアスリートのパーティがあつて。日本人少なかつたし、なんとなく声を掛けたのよね。

リョーマの短い返事に補足するとバンソウコウの子（菊丸さんと言いうらじい）が、「フーヤー」と相槌を打つた。・・・ネコ語？

「ねえそれってテニスじゃないんでしょう？」

「テニスは軽くしか・・・」

「軽く、ってことは初心者じゃないんだ？」

「ほぼ初心者よ。知人の別荘で何回かプレイしたくらいだもの」

「あとで確認してあげるよ」

リョーマは相変わらず偉そうね・・・。

全員に挨拶を済ませると、私はもちろん弦一郎兄様のところへ戻つた。

「挨拶は済んだのか？」

「はい、弦兄様。皆さんフレンドリーな方ばかりで安心しました」

「あははは。リリイちゃんにケンカ越しなヤツがいたら、俺がそれ

買つかう」

「リリイちゃんは美人さんやき、別の心配せんといかんぜよ

「おひ、あんまり一人きりになるなよな！」

弦兄様のお友達はみなさんステキな人ばかりです。

## リリイちゃんなどキドキサバイバル？（後書き）

ネタ切れのため、途中までですが投稿しました。

あまり増やすと収集が付かないため、ドキサバ編は立海・氷帝・青学のみとさせていただきます。

トリップ前のリリイちゃんは20代のため、中学生の王子様達を見ても「キレイ」「カワイイ」と感じてしまいます。

真田弦一郎にたいしては「ステキ」「キセキ」「ギフト」と存在を絶賛しています。超プロコン。

12/22訂正：手塚の「リリイわん」呼びを「リリイ」に変更。  
違和感があつたので。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

ドキサバといえば、女子2人・・・。

リリィちゃんとドキドキサバイバル？

「マネージャーの広瀬だ」

「広瀬静です。宜しくお願ひします」

女子一人じゃ居づらいだろうと、国光さんの気遣いで青学からはマネージャーも参加しています。  
私と同じ中学2年生だそうです。

「真田リリィです。同じ年だから敬語は使わないでね」

「お、同じ年！？」

「見えないけど、そり」

「悪い意味じゃなくって！ 大人っぽいからつらやましいなってつ！」

「かわいい。国光さん、この子どうやって勧誘したの？ ナンパ？」

「ぶ、部長がナンパ！」

「…………違う。越前の彼女だ」

リョーマのガールフレンド！……

真っ赤になっている広瀬さんを私は微笑ましく思った。  
あのクールボーアにガールフレンドかあ。

「改めて、私のことはリリイって呼んでね。貴女のことはシズカ？」

シズカちゃん？」

「あ、静でいいで……いいよ。私はリリイちゃんって呼ばせてもらつていいかな？」

「モチロンだよ。あとね、年上以外は呼び捨て主義だから、リョーマつて呼んでいるけどジヒラシー感じちゃうタイプ？」

「ううん。大丈夫」

「ありがとー。リョーマだけじゃなくて、立海の切原も呼び捨てにしているし、本当に気にしないでね」

「うん」

「シズカ、かわいい。ね、国光さん」

「…………それについての発言は拒否させてもらおう」

「そうだね。『かわいい』って言つたらリョーマが大変だし、ウソでも「かわいくない」って言つたらシズカに失礼だものね。」

「それじゃあ、私は？　かわいい？」

「リリイはかわいいというより、美人だろ？」

「Thanks！　国光さんはハンサムだよ」

「…………」

私のコメントに、「発言を拒否」した国光さんの照れたような困つたような顔に自然に笑みが浮かぶ。

シズカは国光さんのそういう側面になれないのか、始終ビックリした顔をしていた。

## リリィちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

リョーマのガールフレンドにしました。 静ちゃん。  
彼女はドキサバヒロインではなく学プリヒロインですが、私のエロヒイキで登場させました。 梓真ちゃんもかわいいけどね！ 彼女よりはお兄さんを出したい。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

連続更新予定1日目です。感想をいただけないと調子こじて更新記録  
が伸びるかも？

## リリィちゃんとドキドキサバイバル？

航海日和だと思われた空は、夕方になると真っ黒な雲に覆わされてきた。

「嵐でしょ、つか？」

甲板に出て窓を気にしていた俺に、後ろから百合が声を掛けってきた。

「つむ……が、船長が知らずに出航したとは思えん。航海に支障はないはずだ」

「一応、どのくらい荒れそなのが、タロウさん経由で伺つてみますね」

我が妹ながら、百合には才色兼備という四文字熟語がふさわしい。国語・日本史・古典はからきしだが、その他は学業優秀。

道具を使った競技は不得手だが、運動神経も秀逸。

機転もきき、コーモアもあり、料理上手だ。

（正しくは、真田弦一郎に比べればコーモアがあり、真田弦一郎の好物である味噌汁と焼き肉だけはマスター レベルなだけである）

こんなにすばらしい妹がいる事実が今でも信じられない。

・・・と、ちよび近くにいた跡部に言つたといふ、「・・・・・・  
お前ら、似たもの兄弟だな」と返された。どういう意味だ？

れておき、しづらへすると百合が、顔を曇らせて戻ってきた。

「どうした?」「

「兄様、甲板は危険なので封鎖するわつです。お部屋に戻りましょ

う

「……もあるわつな」

高くなつてきた波をチラリと見て、俺は百合とともに甲板を後にした。

「こんなに揺れちゃ気になつて眠れないよ。ゲームでもしない?」

「あ、俺人生ゲーム持つてきてるわす」

「だから、んなに力バンがでかかつたのかよ

「リリイさん、私とチェスでもどうですか?」

「俺も横でみせてもらつてもいいか?」

「俺、トランプ持つてきてるわすよ!」

順番に不一、赤也、ジャッカル、柳生、手塚、桃城の台詞だ。

柳生は合宿にチェスを持ってきているのか。たるんぐるーと思つたが、船の遊戯室にあつたものらしい。

柳生より人生ゲームを持ってきた赤也を指導すべきだつたのだが、百合のことになると俺も私情を持ち込んでしまつようだ。反省せねば。

百合と柳生。そして、なぜかチェスに興味があるという手塚と（註：リリイちゃんと初めてのお友達参照）、日常からチェスをしていうな跡部がチェス盤に集まっている。

手塚とは祖父経由で友人になつたらしいと聞いている。

・・・無口で鉄面皮の手塚と友誼<sup>ゆうき</sup>が結ぶのか？と心配したが、百合の<sup>せいらい</sup>生来の親しみやすさで、上手く交友しているようだ。

跡部のほつとも、驚いたことに顔見知りらしい。なんでも鳳が困つているところに偶然通りかかり手を貸したことが切欠だといつ。（註：リリイちゃんと救世主伝説参照。リリイちゃんはチンピラに頭突きをかましたことは伏せていました。跡部とは口裏合わせ済）

「ルールは将棋に良く似ているんですよ」

柳生が手塚に説明をしている。

「一番の違いはチェスが消耗戦つてところだな。捨て駒はよくよく考えないとダメだ」

「キングをキャッスリングして、ビショップやポーンで戦うのがセオリ一でしょうか？ ポーンとキングはこう・・・。ナイトは・・・こう。ルークは・・・こう。ビショップは・・・こういう動きが出来ます」

百合が盤上で駒を動かして説明しているようだ。

「・・・分かった気がする。1試合見せてもらつてもいいか？」

「リリイと柳生がどんな戦法を使うか見させてもらつぜ」

俺がなんともなしに彼らのやり取りを見ていると、赤也が俺に声を掛けってきた。

「副ブチヨー。人生ゲームやりませんか？」

青学から越前とマネージャーで、氷帝から六四さんと鳳。ウチからは俺と副ブチヨーで6人ですよ。

常勝立海！としてはたかがゲームでもワンツーフィニッシュが当然つすよね

「無論だな」

「俺は見学させてもらおつか。・・・」「//キサーがあれば特性乾ドリンクを罰ゲームに使えたのだが・・・残念だ」

「！（ビクッ）」

乾の台詞に青学の2人が青ざめた。・・・よほど効果のある罰ゲーム用のドリンクなのだな。

今度赤也が悪さをしたときに飲ませるために作り方を聞いておくのも良いかもしだん。

（赤也大ピンチ！）

そしてゲームが始まつたわけだが・・・。

「ブッ。副ブチヨー。早速結婚すか」

「・・・」

「真田サン、連続双子出産つすね。おめでとーっす

「…………」

「あつ、真田さん離婚ですね」

「…………」

「…………真田。お前ゲーム運無いな」

「…………」

結婚・出産（連続双子）・離婚・交通事故・会社倒産と続いたところで、宍戸が俺に止めを刺した。

「ゲームで不運を使い果たしたんですから、このあとまとい」とばかりですわよ、弦兄様

いつの間にか後ろでゲームを見ていたらしい百合が俺にフォローを入れた。

「そうだな」

「ええ」

チエスのほうはどうなっているのかと思えば、手塚と柳生が長考状態に入っているようで、跡部は Baba 抜きで忍足のカードを見てせせら笑つており、百合は俺の元へ来たらしい。

「ちよ、跡部！ ジヤマせんといって！」

「あまりにももち札が多くて顔が緩んだ

「あ、忍足がババ持つてるっぽい？」

不二がポソリと呟くと、忍足の横の仁王がニヤッと笑った。

「俺んとこにはババ無かつたき、ずーっともつとるんじやろ？」

「ノーノメントやー！」

「語るに落ちてるよ、忍足」

精市が忍足からカードを抜き、一ヶコツわらって2枚を捨てた。

「すうじいね、幸村。残り1枚じゃないか

あちらでの不運は忍足のようだ。

そのうちに揺れがひどくなつてきて、まずチエス盤のコマが倒れた。

「あつー。」

「・・・もつチエスの続行は厳しいな」

「人生ゲームもコマから車がはみ出ますね」

「つづーか、今嵐のド真ん中つてヤツじやねーのか？」

「ウブツ！ 摆れがすごくてコーヒー鼻に入った」

「きたねえな、ジャッカル。近寄るなよ」

そして嵐はどんどんと酷くなり、神監督が現れ、俺達は救命道具を身につけ、救助ボートに乗ることになった。

俺は百合の手をしっかりと握り、まず妹をボートに乗せ、赤也、3年レギュラーを確認すると幸村と一緒にボートに飛び移った。

他の学校のメンバーも無事に救命ボートに乗り込めたようだ。細切れだが叫び声でそれぞれの安否を確認しつつ、俺達はボートの上で身を小さくしながらひたすらこの嵐が通り過ぎるのを待った。

## リリィちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

げんたろうは、将棋 チェスという流れで覚えました。脳内で将棋ルールを変換しつつ指したので、あまり楽しめなかつたよ。でもチエス出来る人って格好よくね？

人生ゲームは随分やつていないので、倒産・破産とか離婚があるかは知りません。テキトーですいません。

遭難のあたりの文章は自分でも「ナンダカナー」と思つんですが、ドキサバでも「ナンダカナー」と思つたので、ツルつと流しました。適當でごめんなさい。

船の遭難とか「タイタニック」と「伯爵令嬢」（古ーくらしいしか知識ないんだもん。

リリイちゃんとドキドキバイバル？（前書き）

連続投稿一日目一。

## リリィちゃんとドキドキサバイバル？

乗組員とタローさんと、青春学園（不思議なネーミングだけじ、日本では普通のかしら？違つよ）のスミレさん（やう呼べと言われた）が居ない。

おそらく皆さん船に残つたと思われます。

あの大きな船が沈没するとは思えないので、きっと無事でしょう。

だって、私達の救助ボートが一艘も転覆しなかつたくらいですから。間違いなくあちらに残つたほうが生存率が高いと思います。私達はなぜ救助ボートに乗せられたのでしょうか。火事でもあつたのかしら・・・。

ともかく、結果として無人島らしき場所に漂流しました。  
皆さん無事です。

暗闇の中、ボートに大荷物がボンボンと落とされていたのは分かつていたのですが、朝になつてスポーツバックとテニスラケットだと氣付いたときは、冗談かと思いました。

ボートの中でテニスが出来るわけもないのに。  
でも、この無人島ならテニスが出来そうですね。・・・テニスより先にすることはたくさんあるんですけど。

私達は、ともかく開けた場所に行こうとしたくなり、山道とうか獣道を歩き始めました。

季節は夏。雨水や海水で濡れた服はすぐに乾きましたが・・・。  
潮<sup>おじ</sup>で体中がパリパリしてきました。

海水を肌に残しておくと、トラブルになりかねません。  
歩き始めてすぐに小川を見つけたので、身体を洗おうとした話になりました。

「女子は上流！ 男子は下流だ！」

弦兄様が頼もしく指示を出してくれます。

「せうだね。除きしないよつてお互いでお互いを見張つておくから  
安心していいよ」

「あまり深いところにはこくなよ」

私はシズカと一緒に少し上流まで上り、そこから下流に向つて声を  
掛けました。

声を掛け合つて、双方無事であることをアピールするのです。

「つ、つめたいっ！」

「まず、バッグの中のタオルをキツチリあらって干しておこう。身体を洗うのはその後だね。冷えちゃう」

「だね。バッグの中身、全部濡れちゃつてるー」

「携帯もダメ？」

「携帯はビニールポーチに入っていたから・・・時間だけは分かる。今9時25分」

「充電切れちゃうから、電源落としておいたほうがこ ciòよ  
「そうする」

私達は下流にも聞こえたる声で会話をしながら身繕いを終えた。

その後弦兄様たちと合流した私たちは、獣道をそぞろ登る。

けつこう急勾配でシズカは大丈夫かな?と思つたけど、リョーマがフォローしているみたい。合わない間に頼もしくなったんだね。

私のこともいろんな人が心配してくれたけど、登山やガールスカウトで山道は慣れているし、一晩の徹夜でへべるほどヤワな体力じゃない。

ところが・・・リョーマはシズカを他の男子におんぶされたくなかったみたいなので、私とリョーマが交互にシズカをおんぶすることになつた。

傾斜40度レベルでは周囲に手を貸してもらつたり、仁王さんがどこからともなく杖を探してきてくれたりで、それほどの負荷なく進むことが出来ました。

それにほぼリョーマがおんぶしたし。文句言ったのはリョーマなんだから当然だよね。

「おなじ女の子なのに・・・。」「めんね、ごめんねっ  
「気にしないで。私、シズカの10倍は体力あるから  
「・・・うん、ありそつ。でもごめん。」

「リョーマのヤツがグチグチ言わなければ俺らがおんぶするんだけ

どよ。マジで「めんな真田わん」

急傾斜で手を貸してくれたモモシロ君が眉を下げてそつそつとくれた。

「同じ年だし、リリイでいいよ」

「そつか？俺は桃城でいいぜ！」

「じゃ、モモで」

「モモつ！？」

「モモつ！？」

「アンタ、本当に大丈夫なのか？」

バンダナの男の子がボソリと聞いてきた。

「平気。毎日20キロ走っているし、夏はガールスカウトで冬は雪山登山もやつてたし、その荷物に比べたらシズカは軽いよ

「すげえな。俺も朝、走りこんでる」

「家が近所ならすれ違うかもしね。実際はムリだけど。　・　・　・

私のことはリリイって呼んで？」

「俺は海棠だ。海棠薫」

「カオル・・・」

「海棠と呼んでくれ

「・　・　・　わかつた」

ファーストネームが好きじゃないのかな？

あとで兄様に聞いたら、「カオル」という名前は女性にも付けられる中性的な名前だから、それがイヤなのだろう、とのことだった。

・　思春期ですものね。

一時間も歩くと開けた場所に出た。

ありがたいことに「コテージのよつなものまである。

「ヒヒなら上空からも見やすいな」

「拠点つてことでええんぢやう?」

「マジ疲れた~」

「アホか! お前よりリリイちゃんのほうが疲れてるつつのー。」

「ごめんね、リリイちゃん」

「大丈夫だよ、あと5往復できるくらい元気げんき」

「・・・って言つてるつすよ」

「まあ、真田の妹だからな」

「越前は・・・へバつてるつすね。・・・普ッ」

部長メンバーの3人が管理人室のようなひときわ大きなコテージに入り、しばらくすると数冊の本を持って戻ってきた。

島の地図らしきもの。

その「島図鑑と野草図鑑がそれぞれ3冊。

管理人室には賞味期限ギリギリの調味料が大量と、ジッポライターが数本。あと、ろつそくが大量にあつたという。

この島の自生植物が食べられるのであれば、しばらくは飢えることはなさそう。海もあるし、川もある（先ほど小川で見たが、魚が泳いでいた）。

私達は開けたこの場所にのりしを作った担当。図鑑片手に植物を採取する担当。海で魚を釣る担当。島を探索する担当に分かれ、サバイバルの準備を始めた。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

ドキサバつてストーリーが何種類があつたよねー。  
さすがに恐竜が出てくるやつはチョイスする気はないけど・・・オ  
リジナルで締めようか思案中です。

リリイちゃんに対する補足：（つづく気付いていたでしょうが）  
体力バカ

リリイちゃんのドキドキサバイバル？（前書き）

連日投稿——つ！

そして視点は、半?オリキャラの静ちゃん。

## リリィちゃんのドキドキサバイバル？

「女子は好きなものを選べ」

「「「「だな」「」「」」

とこうことど、私とリリィちゃんは好きな担当を選んでいこと言わ  
れました。

今までリリィちゃんとヨーマ君におんぶされてきた私なので、狼の  
煙担当にさせてもううことにしました。  
小枝くらいなら、捨てるもの。

リリィちゃんはウーン？と首をかしげていましたが、島の探索班を  
選びました。い、一番ハードそつ。

曰く『私が島に詳しくなつたら、男子とは行きにくうことに行け  
るでしょう？』とのこと。考えているなあ。

狼煙の担当は青学では私とヨーマ君と乾先輩。氷帝では樺地君と  
鳳君。立海では柳生さんと切原さん。

乾先輩と柳生さんが狼煙の設計図を地面に書き、大きなものを樺地  
君率先で積み上げると、小枝をたくさん拾ってきてその上に積み上  
げた。

どんどん燃やすから小枝が多いほうがいいので、狼煙から少し離れ  
た場所に小枝をたくさん積み上げることにした。

切原さんが枝打ちを管理人室の裏から見つけてきたので、周囲のヤブを払うことになった。怪我の原因にもなるし、払ったほうがいいんだって。

平地での作業だけど、結構な重労働でヘトヘトになつたころ、他のメンバーも戻ってきた。

たくさんのキノコや野草。見た事ない大きな魚。食事は大丈夫みたい！

リリィちゃんは、山歩きで見つけたというレモンとはちみつをお土産に持つてきた。

「はちみつって・・・蜂の巣から獲つてきたの？ あぶないじゃない！」

「大丈夫だったよ。養蜂家に、課外授業でコツ教えてもらつたことあるし。ハチミツレモンが作れるよ」

「ああ、くやしいが百合の手際は見事だつた」

「リリィに危険なことをさせるわけには行かねえからな。コツは掴んだ。器用そうなヤツに仕込むから、明日からは男の仕事にする」

氷帝の跡部さんがそう言つてくれて、わたしはホッとした。

リリィちゃんは、同じ年とは思えないくらい大人っぽくて、美人で、頼もしくて、強くて、優しくて・・・本当にステキな人だ。キレイな白い肌にかすり傷一つだってつけて欲しくない。

(半年ほど前までは、血まみれで試合をしていたのだが、 静ちゃん  
はまだ知りません)

「はい、 シズカ。 あ～ん？」

リリイちゃんが、 人差し指についたハチミツを私の口元に近づけて  
きた。  
ものすごく恥ずかしかつたけど、 私は彼女の指をパクリと口に含ん  
だ。

リリイちゃんのドキドキサバイバル？（後書き）

リョーマだってヤツタコトナイヨーーー。（笑）

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

まさかのジャッカル視点（笑

## リリイちゃんなどキドキサバイバル？

俺は、どう考へても山菜獲りだろ。

そして案の定ダブルスを組んでいるブン太も食料係であるキノコと山菜獲りに立候補した。

魚を丸かじりするわけにはいかねーから、いつこじたんだろうな。

俺は父親が無職だったころ、近所の公園やちつせえ山で食べられそうな葉っぱを巻ってた時があった。

日本の学生じゃ信じられないことかもしけれ一けど、ブラジルにはもつと底辺の生活をしていたヤツと友達だったこともあった。だから、俺は恥ずかしいとか思わない。公園で葉っぱ巻くくらいなんともねえ。

つてわけで、オレは見える葉っぱに詳しい。

図鑑で見比べての採集は、不二や桃城あたりにまかせて、俺は「見える」と知っている葉っぱをブチブチと巻いた。

「ハラ減つたけど・・・生じや食えねえよな？」

「食つたら腹壊すぞ」

「うー。探索チームのほうが良かつたか？　でも、あつちは動き回るから更にハラが減りそつだもんない」

ブン太がオレの採集した葉っぱを見つめながら切ないため息をついた。

「オレもハラは減っているが……」うつ緊急事態だ。ガマンしているんだぞ？」

「海チームは人数が多いし、あっちに期待しろ」

「だなー。立海じゃ、真田と仁王だったか？」

「ああ

「…………しつかし、真田の妹スゲーよな」

「あのおんぶか？」

「おう。でもって探索チームだろ。俺、真田にベツタリで海チームに入るかと思つたぜい。それか青学のマネと一緒にブン太が俺の横に座り込んで、俺の手元を見ながら葉っぱを巻り始めた。

食べることに直結する作業だから、気まぐれなブン太も真面目に取り組んでくれて助かるぜ。

「このあいだ、赤也を抱き上げて高い高いしたって話聞いたか？」

ブン太の言葉に、他の山菜メンバーである不一と桃城、宍戸が食いついた。

「切原を高い高い？・・・つて子供にするアレ？」

不一が聞いてきた。

辞書片手に毒々しい赤いキノコを握っている。

俺が注視していると「食べられるんだって」と図鑑を広げて見せた。

「おう。なんでも友情の証とかなんとか」

「友情？ アメリカってそんなことするんすか？」

「しないだろ。・・・つか、気の毒にな、切原。同じ年の女子に

高い高い・・・」

「それって友達になつたら全員対象なのかな？ つてことは手塚も

？」

不一の言葉に俺達は、リリイちゃんが手塚を高い高いしているシンを思い浮かべようとして・・・モザイクが掛かった。

想像力にも限界があるつづーのー！

「そんなカンジはしないけど。・・・鉄面皮の手塚でもあの子に高い高いなんてされてたら、少しほけ動不審になるだろつし」「さすがに、ねーっすよ。それはねーっすわ」

「俺もそう思う」

「じゃあ、今の所高い高いされたのは切原だけなんだ？」

「おう。女子でもそんな話は聞かねえぜ」

その後、俺達は山菜を摘みながら知る限りのリリイちゃん情報を二人に教えた。

「へえ。格闘技」

「すげー強えらしいぜ」

「見たことねえけどな」

「サングラスしてたのって、そんな理由だったんすか。てっきりオシャレなのかと」

「言わなくて良かったね、桃城」

「不用意にんなこと言つてたら、真田のゲンコツが飛んできてたぜ」

「あと手塚から、グランド100周くらい言われただろうね」

「それにしても、彼女の試合をもう見られないなんて残念だな」

「俺らん中では、鳳だったら、頭突きを目の前で見たはずだぜ」

「――頭突き!?」

六戸の説明に、ブン太が「あー」と呟いた。

「真田知らねーんだるうなあ

「これ以上シスコソになつたらウゼーから、黙つてよづせ」

リリイちゃんの話をしているついに持つてきた籠もこっぽいになつた。

「こんなもんでいいか。

俺達は成果を手にコテージのある広間に戻ることとした。



## リリイちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

地の文が少なくなりました。会話文ばっかで「めんなさい」。ストックがなくなつたので、明日の更新はムリそうかも。でもがんばる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3156y/>

---

いとしのリリィ

2011年12月29日18時14分発行